

ティーチング・ポートフォリオ(教育業績ファイル)

教員氏名	藤原 海考
主な担当科目	オペラ演習 I ③,実技個人レッスン[声楽 I ①,声楽 I ②,声楽 I ③,声楽 I ④,音楽芸術表現実技(声楽)②]
シラバス	次ページをご参照ください
2022年の教育目標・授業に臨む姿勢	演奏活動等の研究活動を通じ声楽やオペラの指導法の向上を図る。更に、学生の技術向上のため様々な教育システム及び講座等を導入し、学生に舞台経験を積ませる企画を模索する。
2022年の教育に関する自己評価	演奏活動等の研究活動を通じ声楽やオペラの指導法の向上をおおむね図ることができた。また、学生の技術向上のため様々な公開講座などを通じて学生に舞台経験を積ませる企画を模索することができた。
2022年のFD活動に関する自己評価	主に声楽学内組織及び基礎ゼミ学内組織でFD活動を行い、特に声楽レッスンやオペラの授業でコロナ対策を中心に行った。2022年度はFD活動をおおむね積極的に行ったといえる。
授業改善のために取り入れた研修内容	コロナ禍が後期に入って少し緩和したが、引き続き対策を行い、教育内容など様々な点で教員相互で連携を図った。

科目名－クラス名

オペラ演習Ⅰ③

曜日時限

火 3時限

火 4時限

担当教員

藤原 海考

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法	定期試験				その他の試験	合計
					筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
演習	3～	通年	0		30	0	0	70	0	100

教育到達目標と概要

この科目は本学声楽コース最大の特徴である「オペラ」の演習授業である。オペラ演習Ⅰ①②で培った内容を基に(1)総合芸術であるオペラを体験することで、演じながら歌うことの楽しさを知り、オペラにより深い興味を抱くこと、(2)音楽表現と身体表現を融合させ歌唱表現の向上に役立てていくこと、(3)他者との共同作業によりひとつのシーンを作りあげること、アンサンブル能力、コミュニケーション能力を育むこと、を目的とする。

授業は4グループに分かれて実施する(1グループ8名)。グループ毎に導入に適したアンサンブルとレチタティーヴォを取り上げて勉強する。グループ担当教員がディクショョンや表現を、指揮者が音楽を、そして数回ほど演技的側面を演出家が担当し、全員がそれぞれの指導を受けられるように展開する。前期のまとめでは歌唱のみの発表、後期試演会は演技付きで行う。オペラに関する専門知識を得るとともに、技術力、表現力、創造力、コミュニケーション能力、チームワークができる力を向上させることを目標とする。

学修成果

- ①音楽と台本によって構成されるオペラスコアの読み方が理解できる。
- ②演技をすることによって自己表現の可能性を拡げ、歌唱表現に役立てることができる。
- ③ひとつのシーンをグループで作りに上げることによって、コミュニケーション能力や、チームワークでの責任感を育むことができる

授業展開と内容

- 第1回
 - ・演出家と指揮者によるオペラについての講義
 - ・この授業の進め方を説明する
 - ・「Le nozze di Figaro」と「Cosi fan tutte」より各人の声種や音域等に合わせて、配役や課題のナンバーを決める
 - ・任意の箇所を用い、オペラヴォーカルスコアの見方(読み方)を学ぶ
- 第2回
 - ・自己表現の練習①(自己を紹介する)
 - ・主にレチタティーヴォを用い、イタリア語の発音やアクセントやリズムを学ぶ
- 第3回
 - ・自己表現の練習②(他者から質問を受け、それに答える)
 - ・簡単な重唱曲を用い、歌唱の際のイタリア語の発音、正確な音程、正確なリズムを学ぶ
- 第4回
 - ・物語と登場人物、場面について知る(原作を読む)
 - ・歌詞(レチタティーヴォ、重唱)を音を付けずに読む
 - ・日本語によるせりふ練習、イタリア語によるせりふ練習を行う
- 第5回
 - ・物語と登場人物、場面への理解を深める(原作を読む)
 - ・登場人物の履歴書を作り、各役の性格を考える
- 第6回
 - ・物語と登場人物、場面への理解を深める(原作を読む)
 - ・登場人物の相関図を作り、各役の関係を考える
- 第7回
 - ・音楽的にアンサンブルを歌う、正確に音を重ねる
 - ・作品の舞台となる場所、時代について研究する
- 第8回
 - ・音楽的にアンサンブルを歌う、ダイナミックスを揃える
 - ・役の性格、場面の感情表現を考えて歌唱する
- 第9回
 - ・アンサンブルを構築し、息を合わせて歌唱する
 - ・歌唱と同時に役割を演じることを探求する
- 第10回
 - ・呼吸、ことば、感情などが関連して表現できるよう練習を進める
- 第11回
 - ・理解したことを総合して歌唱表現できるように練習を進める
- 第12回
 - ・チームごとにそれぞれの課題に取り組み、問題点、改善の方法を探る
 - ・発表の順番や出入りを確認する
- 第13回
 - ・チームごとにそれぞれの課題に取り組み、発表の準備をする
 - ・通し稽古を行う
- 第14回
 - ・全クラス合同で前期まとめの発表のリハーサルを行う
 - ・リハーサルを見てクラス内で意見交換をし、完成度を高めるための工夫をする
- 第15回
 - ・全クラス合同で前期まとめの発表を行う
 - ・他クラスの発表について講評を書く(観ることによって学ぶ)
 - ・それぞれ講評を読み、後期の授業に生かす
- 第16回
 - ・演出家による舞台上でのルールの実践や基本動作のワークショップ

	・オペラをする上で不可欠な立ち居振る舞い方を学ぶ
第17回	・演出家の指導によるアンサンブルの立ち稽古 ・音楽と共に演技する方法を学ぶ
第18回	・チームで動線や動きを考える ・舞台上の設定について、必要な大道具・小道具を含めて具体化していく
第19回	・演出家による指導を受け、違ったアプローチで動いてみる ・音楽稽古を何度も行き、演技の呼吸と合わせていく
第20回	・チームで動きを考えシーンを作る①（レチタティーヴォ）
第21回	・チームで動きを考えシーンを作る②（重唱） ・指揮を見ながら演じ、歌うための工夫をする
第22回	・チームで動きを考えシーンを作る③（全体） ・前回の課題を解決する
第23回	・音楽表現と身体表現が融合するように反復練習をする①（互いに問題点を指摘しあう） ・他者の姿を見て意見をまとめることで、自分の学びに役立てる
第24回	・音楽表現と身体表現が融合するように反復練習をする②（前回の課題を解決する） ・互いに意見を出し合い、より良い表現の方法を模索する
第25回	・アンサンブルの質を高め、シーンをまとめていく ・音楽面、演技面、それぞれの課題をひとつづつクリアしていく
第26回	・試演会に向けてそれぞれの課題に取り組む ・音楽面、演技面双方の指摘を解決する方法を考える
第27回	・試演会に向けてそれぞれの課題に取り組み、発表の準備をする ・衣装、道具の確認をする
第28回	・通し稽古①（問題点を確認する） ・全体の流れと演奏時間を確認する
第29回	・通し稽古②（前回の問題点を解決する） ・出入り、道具を含めた場面転換など、全体の構成を確認する ・演出家による動きの確認を受ける
第30回	・全クラス合同で試演会のリハーサルを行う ・リハーサルを見てクラス内で意見交換をし、完成度を高めるための工夫をする

履修上の注意

- ・この授業は一週2コマ（180分）で展開します。
- ・授業展開は進行の目安であり、稽古では到達度により内容が前後したり戻ったりすることを理解して臨んでください。
- ・毎回の授業で歌い演じることが「成果発表」となるので積極的に出て発表するようにしてください。
- ・立ち稽古は役柄にあった服装（稽古着）と靴を用意すること。（C301スタジオは上履き着用）
- ・小道具は必要に応じて各自で、またはチームで用意すること。
- ・大学オペラ公演出演等により正規の授業に参加できない学生がいた場合は、前期まとめの発表および後期試演会の前に、その補完として全体で補講を行う予定です。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

- ・アンサンブルは個々が準備していないと相手に迷惑がかかる事を自覚し、事前の譜読み・授業の復習をきちんと行うこと。（120分/週）
- ・関連本や原作、DVD等の視聴覚資料を活用するなど、考え得る方法で積極的に知識を増やすこと。（120分/週）
- ・前期まとめの発表、後期試演会で講評によるフィードバックを行います。

教科書・参考書

- 教科書：女声：W.A.MOZART “Le nozze di Figaro”（Bärenreiter版 Vocal score）
男声：W.A.MOZART “Cosi fan tutte”（Bärenreiter版 Vocal score）
- その他、グループ担当教員から指示のあった楽譜を用意すること
- 参考書：モーツァルト「フィガロの結婚」対訳本（出版社の指定はありません）
モーツァルト「コジ・ファン・トゥッテ」対訳本（出版社の指定はありません）

科目名－クラス名

オペラ演習Ⅰ③

A

曜日時限

火 3時限

火 4時限

担当教員

藤原 海考

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法	定期試験				その他の試験	合計
					筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
演習	3～	通年	4		30	0	0	70	0	100

教育到達目標と概要

この科目は本学声楽コース最大の特徴である「オペラ」の演習授業である。オペラ演習Ⅰ①②で培った内容を基に(1)総合芸術であるオペラを体験することで、演じながら歌うことの楽しさを知り、オペラにより深い興味を抱くこと、(2)音楽表現と身体表現を融合させ歌唱表現の向上に役立てていくこと、(3)他者との共同作業によりひとつのシーンを作りあげることで、アンサンブル能力、コミュニケーション能力を育むこと、を目的とする。

授業は4グループに分かれて実施する(1グループ8名)。グループ毎に導入に適したアンサンブルとレチタティーヴォを取り上げて勉強する。グループ担当教員がディクショナリーや表現を、指揮者が音楽を、そして数回ほど演技的側面を演出家が担当し、全員がそれぞれの指導を受けられるように展開する。前期のまとめでは歌唱のみの発表、後期試演会は演技付きで行う。オペラに関する専門知識を得るとともに、技術力、表現力、創造力、コミュニケーション能力、チームワークができる力を向上させることを目標とする。

学修成果

- ①音楽と台本によって構成されるオペラスコアの読み方が理解できる。
- ②演技をすることによって自己表現の可能性を拡げ、歌唱表現に役立てることができる。
- ③ひとつのシーンをグループで作りに上げることによって、コミュニケーション能力や、チームワークでの責任感を育むことができる

授業展開と内容

- 第1回
 - ・演出家と指揮者によるオペラについての講義
 - ・この授業の進め方を説明する
 - ・「Le nozze di Figaro」と「Cosi fan tutte」より各人の声種や音域等に合わせて、配役や課題のナンバーを決める
 - ・任意の箇所を用い、オペラヴォーカルスコアの見方(読み方)を学ぶ
- 第2回
 - ・自己表現の練習①(自己を紹介する)
 - ・主にレチタティーヴォを用い、イタリア語の発音やアクセントやリズムを学ぶ
- 第3回
 - ・自己表現の練習②(他者から質問を受け、それに答える)
 - ・簡単な重唱曲を用い、歌唱の際のイタリア語の発音、正確な音程、正確なリズムを学ぶ
- 第4回
 - ・物語と登場人物、場面について知る(原作を読む)
 - ・歌詞(レチタティーヴォ、重唱)を音を付けずに読む
 - ・日本語によるせりふ練習、イタリア語によるせりふ練習を行う
- 第5回
 - ・物語と登場人物、場面への理解を深める(原作を読む)
 - ・登場人物の履歴書を作り、各役の性格を考える
- 第6回
 - ・物語と登場人物、場面への理解を深める(原作を読む)
 - ・登場人物の相関図を作り、各役の関係を考える
- 第7回
 - ・音楽的にアンサンブルを歌う、正確に音を重ねる
 - ・作品の舞台となる場所、時代について研究する
- 第8回
 - ・音楽的にアンサンブルを歌う、ダイナミックスを揃える
 - ・役の性格、場面の感情表現を考えて歌唱する
- 第9回
 - ・アンサンブルを構築し、息を合わせて歌唱する
 - ・歌唱と同時に役割を演じることを探求する
- 第10回
 - ・呼吸、ことば、感情などが関連して表現できるよう練習を進める
- 第11回
 - ・理解したことを総合して歌唱表現できるように練習を進める
- 第12回
 - ・チームごとにそれぞれの課題に取り組み、問題点、改善の方法を探る
 - ・発表の順番や出入りを確認する
- 第13回
 - ・チームごとにそれぞれの課題に取り組み、発表の準備をする
 - ・通し稽古を行う
- 第14回
 - ・全クラス合同で前期まとめの発表のリハーサルを行う
 - ・リハーサルを見てクラス内で意見交換をし、完成度を高めるための工夫をする
- 第15回
 - ・全クラス合同で前期まとめの発表を行う
 - ・他クラスの発表について講評を書く(観ることによって学ぶ)
 - ・それぞれ講評を読み、後期の授業に生かす
- 第16回
 - ・演出家による舞台上でのルールの実践や基本動作のワークショップ

	・オペラをする上で不可欠な立ち居振る舞い方を学ぶ
第17回	・演出家の指導によるアンサンブルの立ち稽古 ・音楽と共に演技する方法を学ぶ
第18回	・チームで動線や動きを考える ・舞台上の設定について、必要な大道具・小道具を含めて具体化していく
第19回	・演出家による指導を受け、違ったアプローチで動いてみる ・音楽稽古を何度も行き、演技の呼吸と合わせていく
第20回	・チームで動きを考えシーンを作る①（レチタティーヴォ）
第21回	・チームで動きを考えシーンを作る②（重唱） ・指揮を見ながら演じ、歌うための工夫をする
第22回	・チームで動きを考えシーンを作る③（全体） ・前回の課題を解決する
第23回	・音楽表現と身体表現が融合するように反復練習をする①（互いに問題点を指摘しあう） ・他者の姿を見て意見をまとめることで、自分の学びに役立てる
第24回	・音楽表現と身体表現が融合するように反復練習をする②（前回の課題を解決する） ・互いに意見を出し合い、より良い表現の方法を模索する
第25回	・アンサンブルの質を高め、シーンをまとめていく ・音楽面、演技面、それぞれの課題をひとつづつクリアしていく
第26回	・試演会に向けてそれぞれの課題に取り組む ・音楽面、演技面双方の指摘を解決する方法を考える
第27回	・試演会に向けてそれぞれの課題に取り組み、発表の準備をする ・衣装、道具の確認をする
第28回	・通し稽古①（問題点を確認する） ・全体の流れと演奏時間を確認する
第29回	・通し稽古②（前回の問題点を解決する） ・出入り、道具を含めた場面転換など、全体の構成を確認する ・演出家による動きの確認を受ける
第30回	・全クラス合同で試演会のリハーサルを行う ・リハーサルを見てクラス内で意見交換をし、完成度を高めるための工夫をする

履修上の注意

- ・この授業は一週2コマ（180分）で展開します。
- ・授業展開は進行の目安であり、稽古では到達度により内容が前後したり戻ったりすることを理解して臨んでください。
- ・毎回の授業で歌い演じることが「成果発表」となるので積極的に出て発表するようにしてください。
- ・立ち稽古は役柄にあった服装（稽古着）と靴を用意すること。（C301スタジオは上履き着用）
- ・小道具は必要に応じて各自で、またはチームで用意すること。
- ・大学オペラ公演出演等により正規の授業に参加できない学生がいた場合は、前期まとめの発表および後期試演会の前に、その補完として全体で補講を行う予定です。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

- ・アンサンブルは個々が準備していないと相手に迷惑がかかる事を自覚し、事前の譜読み・授業の復習をきちんと行うこと。（120分/週）
- ・関連本や原作、DVD等の視聴覚資料を活用するなど、考え得る方法で積極的に知識を増やすこと。（120分/週）
- ・前期まとめの発表、後期試演会で講評によるフィードバックを行います。

教科書・参考書

- 教科書：女声：W.A.MOZART “Le nozze di Figaro”（Bärenreiter版 Vocal score）
男声：W.A.MOZART “Cosi fan tutte”（Bärenreiter版 Vocal score）
- その他、グループ担当教員から指示のあった楽譜を用意すること
- 参考書：モーツァルト「フィガロの結婚」対訳本（出版社の指定はありません）
モーツァルト「コジ・ファン・トゥッテ」対訳本（出版社の指定はありません）

科目名－クラス名

声楽Ⅰ①

曜日時限

担当教員

実技

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
実技・実習	1～	通年	6	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

この科目は、大学での学びの根幹となる主科実技の個人レッスンである。ベルカント唱法に基いた呼吸～発声～共鳴に至るまでの歌唱の技術を学び体得していくことを目標とする。1年次は30分の個人レッスンを週2回（計60分）行う。担当教員と曲目を選定し、イタリア語の正確な発音を学ぶとともに、発声の基本的な訓練を積み重ねながら少しずつ歌う身体を作っていく。実技試験の課題曲は前期・後期とも「イタリア古典歌曲1曲(4分以内)」 実技試験の点数をもって評価とする。

学修成果

- ①歌唱の基本（発声、呼吸、支え等）を身につけ、ベルカント唱法の基礎力を高めることができる。
- ②イタリア語の正確な発音を覚えることができる。
- ③イタリア古典歌曲（1792年のRossini生誕以前の作曲者による作品）のレパートリーを作り、演奏法や様式感を理解することができる。

授業展開と内容

第1回	歌う姿勢
第2回	呼吸法
第3回	身体の使い方
第4回	発声練習（開口母音）
第5回	発声練習（閉口母音）
第6回	正確な音程
第7回	正確なリズム
第8回	イタリア語の正しい発音(母音)
第9回	イタリア語の正しい発音(子音)
第10回	歌詞の理解
第11回	歌詞の表現
第12回	フレーズと音楽づくり
第13回	前期試験曲の伴奏合わせ
第14回	前期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第15回	前期試験に向けての総合練習
第16回	歌う姿勢と重心
第17回	呼吸法とプレス
第18回	発声練習と身体の使い方（開口母音）
第19回	発声練習と身体の使い方（閉口母音）
第20回	正確な音程と歌い方
第21回	正確なリズムと歌い方
第22回	イタリア語の正しい発音とポジション（音読）
第23回	イタリア語の正しい発音とポジション(歌唱)
第24回	歌詞の理解力の向上
第25回	歌詞の表現力の向上
第26回	古典歌曲の様式感
第27回	古典歌曲の音楽表現
第28回	後期試験曲の伴奏合わせ
第29回	後期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第30回	後期試験に向けての総合練習

履修上の注意

実技レッスンであるため、上記の授業展開は必ずしも学修の順序ではなく、個々の能力や進度によって何度も戻ったり、繰り返されたり、同時に進められたりするものであることを理解して臨むこと。

体調管理を怠らないこと。レッスンには伴奏譜の他、必要に応じて辞書など指示のあったものを用意すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

譜読だけではなく楽譜を読み込む勉強をし、その楽曲で知り得る予習は全てしておくこと。

歌詞の意味を調べ音読すること。毎日の練習を積み上げる努力をすること。

一日1～2時間を目安に予習・復習を行うこと。

教科書・参考書

イタリア古典歌曲集 その他、担当教員から指示のあった任意の歌曲集、コンコーネなどの声楽教本

科目名－クラス名

声乐Ⅰ①

曜日時限

担当教員

実技

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	定期試験				その他の試験	合計	
				評価方法	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表		授業内小テスト
実技・実習	1～	通年	6	評価方法	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

この科目は、短大での学びの根幹となる主科実技の個人レッスンである。ベルカント唱法に基いた呼吸～発声～共鳴に至るまでの歌唱の技術を学び体得していくことを目標とする。1年次は30分の個人レッスンを週2回（計60分）行う。担当教員と曲目を選定し、イタリア語の正確な発音を学ぶとともに、発声の基本的な訓練を積み重ねながら少しずつ歌う身体を作っていく。実技試験の課題曲は前期・後期とも「イタリア古典歌曲1曲(4分以内)」 実技試験の点数をもって評価とする。

学修成果

- ①歌唱の基本（発声、呼吸、支え等）を身につけ、ベルカント唱法の基礎力を高めることができる。
- ②イタリア語の正確な発音を覚えることができる。
- ③イタリア古典歌曲（1792年のRossini生誕以前の作曲者による作品）のレパートリーを作り、演奏法や様式感を理解することができる。

授業展開と内容

第1回	歌う姿勢
第2回	呼吸法
第3回	身体の使い方
第4回	発声練習（開口母音）
第5回	発声練習（閉口母音）
第6回	正確な音程
第7回	正確なリズム
第8回	イタリア語の正しい発音(母音)
第9回	イタリア語の正しい発音(子音)
第10回	歌詞の理解
第11回	歌詞の表現
第12回	フレーズと音楽づくり
第13回	前期試験曲の伴奏合わせ
第14回	前期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第15回	前期試験に向けての総合練習
第16回	歌う姿勢と重心
第17回	呼吸法とプレス
第18回	発声練習と身体の使い方（開口母音）
第19回	発声練習と身体の使い方（閉口母音）
第20回	正確な音程と歌い方
第21回	正確なリズムと歌い方
第22回	イタリア語の正しい発音とポジション（音読）
第23回	イタリア語の正しい発音とポジション(歌唱)
第24回	歌詞の理解力の向上
第25回	歌詞の表現力の向上
第26回	古典歌曲の様式感
第27回	古典歌曲の音楽表現
第28回	後期試験曲の伴奏合わせ
第29回	後期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第30回	後期試験に向けての総合練習

履修上の注意

実技レッスンであるため、上記の授業展開は必ずしも学修の順序ではなく、個々の能力や進度によって何度も戻ったり、繰り返されたり、同時に進められたりするものであることを理解して臨むこと。

体調管理を怠らないこと。

レッスンには伴奏譜の他、必要に応じて辞書など指示のあったものを用意すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

譜読みだけでなく楽譜を読み込む勉強をし、その楽曲で知り得る予習は全てしておくこと。

歌詞の意味を調べ音読すること。

毎日の練習を積み上げる努力をすること。

一日1～2時間を目安に予習・復習を行うこと。

教科書・参考書

イタリア古典歌曲集 その他、担当教員から指示のあった任意の歌曲集、コンコーネなどの声楽教本

科目名－クラス名

声楽Ⅰ①

曜日時限

担当教員

実技

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	定期試験				その他の試験	合計	
				評価方法	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表		授業内小テスト
実技・実習	1～	通年	6	評価方法	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

この科目は、大学での学びの根幹となる主科実技の個人レッスンである。ベルカント唱法に基いた呼吸～発声～共鳴に至るまでの歌唱の技術を学び体得していくことを目標とする。1年次は30分の個人レッスンを週2回（計60分）行う。担当教員と曲目を選定し、イタリア語の正確な発音を学ぶとともに、発声の基本的な訓練を積み重ねながら少しずつ歌う身体を作っていく。実技試験の課題曲は前期・後期とも「イタリア古典歌曲1曲(4分以内)」 実技試験の点数をもって評価とする。

学修成果

- ①歌唱の基本（発声、呼吸、支え等）を身につけ、ベルカント唱法の基礎力を高めることができる。
- ②イタリア語の正確な発音を覚えることができる。
- ③イタリア古典歌曲（1792年のRossini生誕以前の作曲者による作品）のレパートリーを作り、演奏法や様式感を理解することができる。

授業展開と内容

第1回	歌う姿勢
第2回	呼吸法
第3回	身体の使い方
第4回	発声練習（開口母音）
第5回	発声練習（閉口母音）
第6回	正確な音程
第7回	正確なリズム
第8回	イタリア語の正しい発音(母音)
第9回	イタリア語の正しい発音(子音)
第10回	歌詞の理解
第11回	歌詞の表現
第12回	フレーズと音楽づくり
第13回	前期試験曲の伴奏合わせ
第14回	前期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第15回	前期試験に向けての総合練習
第16回	歌う姿勢と重心
第17回	呼吸法とプレス
第18回	発声練習と身体の使い方（開口母音）
第19回	発声練習と身体の使い方（閉口母音）
第20回	正確な音程と歌い方
第21回	正確なリズムと歌い方
第22回	イタリア語の正しい発音とポジション（音読）
第23回	イタリア語の正しい発音とポジション(歌唱)
第24回	歌詞の理解力の向上
第25回	歌詞の表現力の向上
第26回	古典歌曲の様式感
第27回	古典歌曲の音楽表現
第28回	後期試験曲の伴奏合わせ
第29回	後期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第30回	後期試験に向けての総合練習

履修上の注意

実技レッスンであるため、上記の授業展開は必ずしも学修の順序ではなく、個々の能力や進度によって何度も戻ったり、繰り返されたり、同時に進められたりするものであることを理解して臨むこと。

体調管理を怠らないこと。レッスンには伴奏譜の他、必要に応じて辞書など指示のあったものを用意すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

譜読だけではなく楽譜を読み込む勉強をし、その楽曲で知り得る予習は全てしておくこと。

歌詞の意味を調べ音読すること。毎日の練習を積み上げる努力をすること。

一日1～2時間を目安に予習・復習を行うこと。

教科書・参考書

イタリア古典歌曲集 その他、担当教員から指示のあった任意の歌曲集、コンコーネなどの声楽教本

科目名－クラス名

声楽Ⅰ②

曜日時限

担当教員

実技

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	定期試験				その他の試験	合計	
				評価方法	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表		授業内小テスト
実技・実習	2～	通年	6	評価方法	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

この科目は大学での学びの根幹となる主科実技の個人レッスン(週1回60分)である。ベルカント唱法に基いた歌唱の技術を学び体得していくことを目標とする。イタリア古典歌曲に加え、イタリアベルカントの代表的作曲家及びVerdiの歌曲まで時代を広げて勉強する。実技試験課題は、前期「イタリア古典歌曲又はRossini,Donizetti,Bellini,Verdiの歌曲1曲(4分以内)」後期「Rossini,Donizetti,Bellini,Verdiの歌曲1曲(4分以内)」実技試験の点数をもって評価とする。

学修成果

- 歌唱の技術を理解し、ベルカント唱法の基礎力を向上させることができる。
- イタリア古典歌曲(1792年のRossini生誕以前の作曲家による作品)のレパートリーを作り、演奏法と様式感を理解することができる。
- イタリアベルカントの代表的な作曲家(Rossini,Donizetti,Bellini)及びVerdiの室内歌曲のレパートリーを作り、その演奏法と様式感を理解することができる。

授業展開と内容

第1回	呼吸、発声練習
第2回	共鳴、身体の使い方の練習
第3回	イタリア語ディクッション(音読)
第4回	イタリア語ディクッション(歌唱)
第5回	正確な音程とリズム
第6回	イタリア古典歌曲及びRossini,Donizetti,Bellini,Verdiの室内歌曲の様式感
第7回	イタリア古典歌曲及びRossini,Donizetti,Bellini,Verdiの室内歌曲の演奏法
第8回	イタリア語(レチタティーヴォを含む)の正しい発音と歌い方
第9回	歌詞の理解
第10回	歌詞の表現
第11回	時代・様式にあった音楽づくり
第12回	時代・様式にあった表現方法
第13回	前期試験曲の伴奏合わせ
第14回	前期試験曲の伴奏合わせ(暗譜)
第15回	前期試験に向けての総合練習
第16回	呼吸、発声技術の向上
第17回	共鳴、身体の使い方の理解と向上
第18回	イタリア語ディクッションとポジション(音読)
第19回	イタリア語ディクッションとポジション(歌唱)
第20回	正確な音程とリズムを作る能力の向上
第21回	Rossini,Donizetti,Bellini,Verdiの室内歌曲の様式感
第22回	Rossini,Donizetti,Bellini,Verdiの室内歌曲の演奏法
第23回	イタリア語(レチタティーヴォを含む)の正しい発音と歌い方の向上
第24回	歌詞の理解力の向上と表現
第25回	歌詞の表現力の向上と歌唱
第26回	時代・様式にあった音楽づくりと表現
第27回	時代・様式にあった表現方法と歌唱
第28回	後期試験曲の伴奏合わせ
第29回	後期試験曲の伴奏合わせ(暗譜)
第30回	後期試験に向けての総合練習

履修上の注意

実技レッスンであるため、上記の授業展開は必ずしも学修の順序ではなく、個々の能力や進度によって何度も戻ったり、繰り返されたり、同時に進められたりするものであることを理解して臨むこと。体調管理を怠らないこと。レッスンには伴奏譜の他、必要に応じて辞書など指示のあったものを用意すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

譜読みだけでなく楽譜を読み込む勉強をし、その楽曲で知り得る予習は全てしておくこと。
オペラアリアを学ぶ場合は作品全体をよく研究すること。毎日の練習を積み上げる努力をすること。
一日1～2時間を目安に予習・復習を行うこと。

教科書・参考書

イタリア古典歌曲集、Rossini,Donizetti,Bellini,Verdiの歌曲集 その他、担当教員から指示のあった任意の曲集、コンコーネなどの声楽教本など

科目名－クラス名

声乐Ⅰ②

曜日時限

担当教員

実技

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	定期試験				その他の試験	合計	
				評価方法	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表		授業内小テスト
実技・実習	2～	通年	6	評価方法	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

この科目は短大での学びの根幹となる主科実技の個人レッスン(週1回60分)である。ベルカント唱法に基いた歌唱の技術を学び体得していくことを目標とする。イタリア・ベルカントの代表的作曲家及びVerdiまでの室内歌曲の他、日本歌曲、オペラアリアまでを学生の進捗、能力に合わせて学んでいく。実技試験は前期「Rossini, Donizetti, Bellini, Verdiの歌曲1曲(4分以内)」 後期「日本歌曲と自由曲(イタリア語のもの)各1曲(7分以内)」 実技試験の点数をもって評価とする。

学修成果

- 歌唱の技術を理解し、ベルカント唱法の基礎力を向上させることができる。
- イタリア・ベルカントの代表的な作曲家（Rossini, Donizetti, Bellini）及びVerdiの室内歌曲やオペラアリアのレパートリーを作り、その演奏法と様式感を理解することができる。
- 日本歌曲のレパートリーを作ると同時に、詩や曲を通じて日本人の心を深く味わい、それを表現することができる。

授業展開と内容

第1回	呼吸、発声練習
第2回	共鳴、身体の使い方の練習
第3回	イタリア語ディクッション（音読）
第4回	イタリア語（歌唱）
第5回	正確な音程とリズム
第6回	イタリア古典歌曲及びRossini, Donizetti, Bellini, Verdiの室内歌曲の様式感
第7回	イタリア古典歌曲及びRossini, Donizetti, Bellini, Verdiの室内歌曲の演奏法
第8回	イタリア語（レチタティーヴォを含む）の正しい発音と歌い方
第9回	歌詞の理解
第10回	歌詞の表現
第11回	時代・様式にあった音楽づくり
第12回	時代・様式にあった表現方法
第13回	前期試験曲の伴奏合わせ
第14回	前期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第15回	前期試験に向けての総合練習
第16回	呼吸、発声技術の向上
第17回	共鳴、身体の使い方の理解と向上
第18回	イタリア語・日本語 ディクッションとポジション（音読）
第19回	イタリア語・日本語 ディクッションとポジション（歌唱）
第20回	正確な音程とリズムを作る能力の向上
第21回	Rossini, Donizetti, Bellini, Verdiの室内歌曲、オペラアリア及び日本歌曲の様式感
第22回	Rossini, Donizetti, Bellini, Verdiの室内歌曲、オペラアリア及び日本歌曲の演奏法
第23回	イタリア語（レチタティーヴォを含む）・日本語の正しい発音と歌い方の向上
第24回	歌詞の理解力の向上と表現
第25回	歌詞の表現力の向上と歌唱
第26回	時代・様式にあった音楽づくりと表現
第27回	時代・様式にあった表現方法と歌唱
第28回	後期試験曲の伴奏合わせ
第29回	後期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）

履修上の注意

実技レッスンであるため、上記の授業展開は必ずしも学修の順序ではなく、個々の能力や進度によって何度も戻ったり、繰り返されたり、同時に進められたりするものであることを理解して臨むこと。

体調管理を怠らないこと。

レッスンには伴奏譜の他、必要に応じて辞書など指示のあったものを用意すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

譜読みだけでなく楽譜を読み込む勉強をし、その楽曲で知り得る予習は全てしておくこと。

オペラアリアを学ぶ場合は作品全体をよく研究すること。

毎日の練習を積み上げる努力をすること。

一日1～2時間を目安に予習・復習を行うこと。

教科書・参考書

イタリア古典歌曲集、Rossini, Donizetti, Bellini, Verdiの歌曲集、日本歌曲集 その他、担当教員から指示のあった任意の曲集、コンコーネなどの声楽教本など

科目名－クラス名

声楽Ⅰ②

曜日時限

担当教員

実技

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	定期試験				その他の試験	合計	
				評価方法	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表		授業内小テスト
実技・実習	2～	通年	6	評価方法	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

この科目は大学での学びの根幹となる主科実技の個人レッスン(週1回60分)である。ベルカント唱法に基いた歌唱の技術を学び体得していくことを目標とする。イタリア古典歌曲に加え、イタリアベルカントの代表的作曲家及びVerdiの歌曲まで時代を広げて勉強する。実技試験課題は、前期「イタリア古典歌曲又はRossini,Donizetti,Bellini,Verdiの歌曲1曲(4分以内)」後期「Rossini,Donizetti,Bellini,Verdiの歌曲1曲(4分以内)」実技試験の点数をもって評価とする。

学修成果

- 歌唱の技術を理解し、ベルカント唱法の基礎力を向上させることができる。
- イタリア古典歌曲(1792年のRossini生誕以前の作曲家による作品)のレパートリーを作り、演奏法と様式感を理解することができる。
- イタリアベルカントの代表的な作曲家(Rossini,Donizetti,Bellini)及びVerdiの室内歌曲のレパートリーを作り、その演奏法と様式感を理解することができる。

授業展開と内容

第1回	呼吸、発声練習
第2回	共鳴、身体の使い方の練習
第3回	イタリア語ディクッション(音読)
第4回	イタリア語ディクッション(歌唱)
第5回	正確な音程とリズム
第6回	イタリア古典歌曲及びRossini,Donizetti,Bellini,Verdiの室内歌曲の様式感
第7回	イタリア古典歌曲及びRossini,Donizetti,Bellini,Verdiの室内歌曲の演奏法
第8回	イタリア語(レチタティーヴォを含む)の正しい発音と歌い方
第9回	歌詞の理解
第10回	歌詞の表現
第11回	時代・様式にあった音楽づくり
第12回	時代・様式にあった表現方法
第13回	前期試験曲の伴奏合わせ
第14回	前期試験曲の伴奏合わせ(暗譜)
第15回	前期試験に向けての総合練習
第16回	呼吸、発声技術の向上
第17回	共鳴、身体の使い方の理解と向上
第18回	イタリア語ディクッションとポジション(音読)
第19回	イタリア語ディクッションとポジション(歌唱)
第20回	正確な音程とリズムを作る能力の向上
第21回	Rossini,Donizetti,Bellini,Verdiの室内歌曲の様式感
第22回	Rossini,Donizetti,Bellini,Verdiの室内歌曲の演奏法
第23回	イタリア語(レチタティーヴォを含む)の正しい発音と歌い方の向上
第24回	歌詞の理解力の向上と表現
第25回	歌詞の表現力の向上と歌唱
第26回	時代・様式にあった音楽づくりと表現
第27回	時代・様式にあった表現方法と歌唱
第28回	後期試験曲の伴奏合わせ
第29回	後期試験曲の伴奏合わせ(暗譜)
第30回	後期試験に向けての総合練習

履修上の注意

実技レッスンであるため、上記の授業展開は必ずしも学修の順序ではなく、個々の能力や進度によって何度も戻ったり、繰り返されたり、同時に進められたりするものであることを理解して臨むこと。体調管理を怠らないこと。レッスンには伴奏譜の他、必要に応じて辞書など指示のあったものを用意すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

譜読みだけでなく楽譜を読み込む勉強をし、その楽曲で知り得る予習は全てしておくこと。
オペラアリアを学ぶ場合は作品全体をよく研究すること。毎日の練習を積み上げる努力をすること。
一日1～2時間を目安に予習・復習を行うこと。

教科書・参考書

イタリア古典歌曲集、Rossini, Donizetti, Bellini, Verdiの歌曲集 その他、担当教員から指示のあった任意の曲集、コンコーネなどの声楽教本など

科目名－クラス名

声楽 I ③

曜日時限

実技

担当教員

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	定期試験				その他の試験	合計	
				評価方法	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表		授業内小テスト
実技・実習	3～	通年	6	評価方法	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

この科目は大学での学びの根幹となる主科実技の個人レッスン(週1回60分)である。ベルカント唱法に基いた歌唱の技術を学び体得していくことを目標とする。2年次までの歌曲に加え、学生個々の能力・進度に合わせてオペラアリア、近代歌曲など範囲を広げて学んでいく。実技試験課題は、前期・後期とも「自由曲1曲(イタリア語のもの)(5分以内) ※オペラアリアの場合、Verdi以降の作品は除く」試験の点数をもって評価とする。

学修成果

- ①歌唱の技術を理解し、ベルカントに基いた歌唱力を向上させることができる。
- ②各々の楽器(声)に合った歌曲やオペラアリアのレパートリーを作り、その演奏法と様式感を身につけることができる。
- ③レチタティーヴォの歌い方を覚え、身につけることができる。

授業展開と内容

第1回	呼吸、発声練習
第2回	共鳴、身体の使い方の練習
第3回	イタリア語ディクシオン (音読)
第4回	イタリア語ディクシオン (歌唱)
第5回	レチタティーヴォの歌い方 (レチタティーヴォ・セッコ)
第6回	レチタティーヴォの歌い方 (レチタティーヴォ・アッココンパニヤート)
第7回	カデンツァ・修飾音などの歌い方
第8回	アジリタ・ポルタメントなどの歌い方
第9回	歌詞・作品の理解
第10回	歌詞・作品の理解と表現
第11回	時代・様式にあった音楽づくり
第12回	時代・様式にあった表現方法
第13回	前期試験曲の伴奏合わせ
第14回	前期試験曲の伴奏合わせ (暗譜)
第15回	前期試験に向けての総合練習
第16回	呼吸、発声技術の向上
第17回	共鳴、身体の使い方の向上
第18回	イタリア語ディクシオンの向上 (音読)
第19回	イタリア語ディクシオンの向上 (歌唱)
第20回	レチタティーヴォの歌い方の向上 (レチタティーヴォ・セッコ)
第21回	レチタティーヴォの歌い方の向上 (レチタティーヴォ・アッココンパニヤート)
第22回	カデンツァ・修飾音などの歌い方 (ロマン派の楽曲に多用される様々な形)
第23回	アジリタ・ポルタメントなどの歌い方 (ロマン派の楽曲に多用される様々な形)
第24回	歌詞・作品の理解力の向上
第25回	歌詞・作品の理解と表現力の向上
第26回	時代・様式にあった音楽づくりの向上
第27回	時代・様式にあった表現方法の向上
第28回	後期試験曲の伴奏合わせ
第29回	後期試験曲の伴奏合わせ (暗譜)
第30回	後期試験に向けての総合練習

履修上の注意

実技レッスンのため、上記の授業展開は必ずしも学修の順序ではなく、個々の能力や進度によって何度も戻ったり、繰り返されたり、同時に進められたりするものであることを理解して臨むこと。

体調管理を怠らないこと。実技試験でオペラアリアを歌う場合Verdi以降の作品は除くこと。

レッスンには伴奏譜の他、必要に応じて辞書など指示のあったものを用意すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

譜読みだけでなく楽譜を読み込む勉強をし、その楽曲で知り得る予習は全てしておくこと。

オペラアリアを学ぶ場合は作品全体をよく研究すること。

毎日の練習を積み上げる努力をすること。

一日1～2時間を目安に予習・復習を行うこと。

教科書・参考書

担当教員から指示のあった任意の歌曲集、アリア集など

科目名－クラス名

声楽 I ③

曜日時限

実技

担当教員

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	定期試験				その他の試験	合計	
				評価方法	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表		授業内小テスト
実技・実習	3～	通年	6	評価種別	100	0	0	0	0	100
				評価割合						

教育到達目標と概要

この科目は大学での学びの根幹となる主科実技の個人レッスン(週1回60分)である。ベルカント唱法に基いた歌唱の技術を学び体得していくことを目標とする。2年次までの歌曲に加え、学生個々の能力・進度に合わせてオペラアリア、近代歌曲など範囲を広げて学んでいく。実技試験課題は、前期・後期とも「自由曲1曲(イタリア語のもの)(5分以内) ※オペラアリアの場合、Verdi以降の作品は除く」試験の点数をもって評価とする。

学修成果

- ①歌唱の技術を理解し、ベルカントに基いた歌唱力を向上させることができる。
- ②各々の楽器(声)に合った歌曲やオペラアリアのレパートリーを作り、その演奏法と様式感を身につけることができる。
- ③レチタティーヴォの歌い方を覚え、身につけることができる。

授業展開と内容

第1回	呼吸、発声練習
第2回	共鳴、身体の使い方の練習
第3回	イタリア語ディクシオン (音読)
第4回	イタリア語ディクシオン (歌唱)
第5回	レチタティーヴォの歌い方 (レチタティーヴォ・セッコ)
第6回	レチタティーヴォの歌い方 (レチタティーヴォ・アッコンパニヤート)
第7回	カデンツァ・修飾音などの歌い方
第8回	アジリタ・ポルタメントなどの歌い方
第9回	歌詞・作品の理解
第10回	歌詞・作品の理解と表現
第11回	時代・様式にあった音楽づくり
第12回	時代・様式にあった表現方法
第13回	前期試験曲の伴奏合わせ
第14回	前期試験曲の伴奏合わせ (暗譜)
第15回	前期試験に向けての総合練習
第16回	呼吸、発声技術の向上
第17回	共鳴、身体の使い方の向上
第18回	イタリア語ディクシオンの向上 (音読)
第19回	イタリア語ディクシオンの向上 (歌唱)
第20回	レチタティーヴォの歌い方の向上 (レチタティーヴォ・セッコ)
第21回	レチタティーヴォの歌い方の向上 (レチタティーヴォ・アッコンパニヤート)
第22回	カデンツァ・修飾音などの歌い方 (ロマン派の楽曲に多用される様々な形)
第23回	アジリタ・ポルタメントなどの歌い方 (ロマン派の楽曲に多用される様々な形)
第24回	歌詞・作品の理解力の向上
第25回	歌詞・作品の理解と表現力の向上
第26回	時代・様式にあった音楽づくりの向上
第27回	時代・様式にあった表現方法の向上
第28回	後期試験曲の伴奏合わせ
第29回	後期試験曲の伴奏合わせ (暗譜)
第30回	後期試験に向けての総合練習

履修上の注意

実技レッスンのため、上記の授業展開は必ずしも学修の順序ではなく、個々の能力や進度によって何度も戻ったり、繰り返されたり、同時に進められたりするものであることを理解して臨むこと。

体調管理を怠らないこと。実技試験でオペラアリアを歌う場合Verdi以降の作品は除くこと。

レッスンには伴奏譜の他、必要に応じて辞書など指示のあったものを用意すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

譜読みだけでなく楽譜を読み込む勉強をし、その楽曲で知り得る予習は全てしておくこと。

オペラアリアを学ぶ場合は作品全体をよく研究すること。

毎日の練習を積み上げる努力をすること。

一日1～2時間を目安に予習・復習を行うこと。

教科書・参考書

担当教員から指示のあった任意の歌曲集、アリア集など

科目名－クラス名

声楽Ⅰ④

曜日時限

担当教員

実技

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	定期試験				その他の試験	合計	
				評価方法	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表		授業内小テスト
実技・実習	4～	通年	6	評価種別	100	0	0	0	0	100
				評価割合						

教育到達目標と概要

この科目は大学での学びの根幹となる主科実技の個人レッスン(週1回60分)である。ベルカント唱法に基いた歌唱の技術を学び体得していくことを目標とする。学生個々の声種・能力・進度に合わせてオペラアリア、近代歌曲、日本歌曲など幅広いレパートリーを学んでいく。

実技試験課題は、前期「自由曲1曲(イタリア語のもの)(6分以内) ※オペラアリアの場合、Verdi以降の作品は除く」後期「イタリア歌曲または日本歌曲と自由曲(イタリア語)各1曲(10分以内)」 試験の点数をもって評価とする。

学修成果

- ①歌唱の技術を理解し、ベルカントに基いた歌唱力を更に向上させることができる。
- ②各々の楽器(声)に合った歌曲(日本歌曲を含む)やオペラアリアのレパートリーを作り、様式感のある演奏法と表現力を身につけることができる。

授業展開と内容

第1回	呼吸、発声技術の向上
第2回	共鳴、身体の使い方の向上
第3回	イタリア語ディクシオン力の向上(音読)
第4回	イタリア語ディクシオン力の向上(歌唱)
第5回	レチタティーヴォの歌い方の向上(レチタティーヴォ・セッコ)
第6回	レチタティーヴォの歌い方の向上(レチタティーヴォ・アコンパニヤート)
第7回	カデンツァ・修飾音などの歌唱技術の向上
第8回	アジリタ・ポルタメントなどの歌唱技術の向上
第9回	歌詞・作品の理解力の向上
第10回	歌詞・作品の理解と表現力の向上
第11回	時代・様式にあった音楽づくりの向上
第12回	時代・様式にあった表現方法の向上
第13回	前期試験曲の伴奏合わせ
第14回	前期試験曲の伴奏合わせ(暗譜)
第15回	前期試験に向けての総合練習
第16回	呼吸、発声技術の更なる鍛錬
第17回	共鳴、身体の使い方の更なる鍛錬
第18回	イタリア語・日本語 ディクシオン力の習得(音読)
第19回	イタリア語・日本語 ディクシオン力の習得(歌唱)
第20回	レチタティーヴォの歌い方の習得(レチタティーヴォ・セッコ)
第21回	レチタティーヴォの歌い方の習得(レチタティーヴォ・アコンパニヤート)
第22回	カデンツァ・修飾音などの歌唱技術の向上(ロマン派の楽曲に多用される様々な形)
第23回	アジリタ・ポルタメントなどの歌唱技術の向上(ロマン派の楽曲に多用される様々な形)
第24回	歌詞・作品の理解力の習得
第25回	歌詞・作品の理解と表現力の習得
第26回	時代・様式にあった音楽づくりの習得
第27回	時代・様式にあった表現方法の習得
第28回	後期試験曲の伴奏合わせ
第29回	後期試験曲の伴奏合わせ(暗譜)
第30回	後期試験に向けての総合練習

履修上の注意

実技レッスンのため、上記の授業展開は必ずしも学修の順序ではなく、個々の能力や進度によって何度も戻ったり、繰り返されたり、同時に進められたりするものであることを理解して臨むこと。

体調管理を怠らないこと。

実技試験でオペラアリアを歌う場合Verdi以降の作品は除くこと。

レッスンには伴奏譜の他、必要に応じて辞書など指示のあったものを用意すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

譜読みだけでなく楽譜を読み込む勉強をし、その楽曲で知り得る予習は全てしておくこと。

オペラアリアを学ぶ場合は作品全体をよく研究すること。

毎日の練習を積み上げる努力をすること。

一日1～2時間を目安に予習・復習を行うこと。

教科書・参考書

担当教員から指示のあった任意の歌曲集、アリア集など

科目名－クラス名

声楽Ⅰ④

曜日時限

担当教員

実技

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	定期試験				その他の試験	合計	
				評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表		授業内小テスト
実技・実習	4～	通年	6	評価割合	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

この科目は大学での学びの根幹となる主科実技の個人レッスン(週1回60分)である。ベルカント唱法に基いた歌唱の技術を学び体得していくことを目標とする。学生個々の声種・能力・進度に合わせてオペラアリア、近代歌曲、日本歌曲など幅広いレパートリーを学んでいく。

実技試験課題は、前期「自由曲1曲(イタリア語のもの)(6分以内) ※オペラアリアの場合、Verdi以降の作品は除く」後期「イタリア歌曲または日本歌曲と自由曲(イタリア語)各1曲(10分以内)」 試験の点数をもって評価とする。

学修成果

- ①歌唱の技術を理解し、ベルカントに基いた歌唱力を更に向上させることができる。
- ②各々の楽器(声)に合った歌曲(日本歌曲を含む)やオペラアリアのレパートリーを作り、様式感のある演奏法と表現力を身につけることができる。

授業展開と内容

第1回	呼吸、発声技術の向上
第2回	共鳴、身体の使い方の向上
第3回	イタリア語ディクシヨンの向上(音読)
第4回	イタリア語ディクシヨンの向上(歌唱)
第5回	レチタティーヴォの歌い方の向上(レチタティーヴォ・セッコ)
第6回	レチタティーヴォの歌い方の向上(レチタティーヴォ・アコンパニヤート)
第7回	カデンツァ・修飾音などの歌唱技術の向上
第8回	アジリタ・ポルタメントなどの歌唱技術の向上
第9回	歌詞・作品の理解力の向上
第10回	歌詞・作品の理解と表現力の向上
第11回	時代・様式にあった音楽づくりの向上
第12回	時代・様式にあった表現方法の向上
第13回	前期試験曲の伴奏合わせ
第14回	前期試験曲の伴奏合わせ(暗譜)
第15回	前期試験に向けての総合練習
第16回	呼吸、発声技術の更なる鍛錬
第17回	共鳴、身体の使い方の更なる鍛錬
第18回	イタリア語・日本語 ディクシヨンの習得(音読)
第19回	イタリア語・日本語 ディクシヨンの習得(歌唱)
第20回	レチタティーヴォの歌い方の習得(レチタティーヴォ・セッコ)
第21回	レチタティーヴォの歌い方の習得(レチタティーヴォ・アコンパニヤート)
第22回	カデンツァ・修飾音などの歌唱技術の向上(ロマン派の楽曲に多用される様々な形)
第23回	アジリタ・ポルタメントなどの歌唱技術の向上(ロマン派の楽曲に多用される様々な形)
第24回	歌詞・作品の理解力の習得
第25回	歌詞・作品の理解と表現力の習得
第26回	時代・様式にあった音楽づくりの習得
第27回	時代・様式にあった表現方法の習得
第28回	後期試験曲の伴奏合わせ
第29回	後期試験曲の伴奏合わせ(暗譜)
第30回	後期試験に向けての総合練習

履修上の注意

実技レッスンのため、上記の授業展開は必ずしも学修の順序ではなく、個々の能力や進度によって何度も戻ったり、繰り返されたり、同時に進められたりするものであることを理解して臨むこと。

体調管理を怠らないこと。

実技試験でオペラアリアを歌う場合Verdi以降の作品は除くこと。

レッスンには伴奏譜の他、必要に応じて辞書など指示のあったものを用意すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

譜読みだけでなく楽譜を読み込む勉強をし、その楽曲で知り得る予習は全てしておくこと。

オペラアリアを学ぶ場合は作品全体をよく研究すること。

毎日の練習を積み上げる努力をすること。

一日1～2時間を目安に予習・復習を行うこと。

教科書・参考書

担当教員から指示のあった任意の歌曲集、アリア集など

2022年度(後期・通年)「学生による授業評価アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード：1198 教員名：藤原 海考

1) 評価結果に対する所見

まず、33名中の4名の回答ということで、私たちのアンケートへの協力の依頼が十分に浸透していなかったことが伺える。

また、少なくとも未提出の29名の学生の授業評価が不明なため、相対的かつ客観的にコメントすることが極めて難しいと思われる。

ただし、提出があった4名の学生のほとんどが授業には不満があったようで、その点に関しては真摯に受け止め今後の改善につなげていきたい。

2) 要望への対応・改善方策

更にオペラに興味を持ってもらうようにさらに検討を行っていく、とともに、実際には4年次のオペラ演習の選択に20名が履修している現状も鑑みると、一定のモチベーションを保った授業が行えていたのではないかと考える。一方でこの数年学生同士の人間関係がスムーズに行えていない傾向が伺える。この点においても、スタッフが丁寧に学生の様子を見守りケアしていくことが必要だと思える。

3) 今後の課題

基本的に学部3年のオペラ演習では、オペラに興味を持ち、好きになってもらい、更なるオペラの勉強を重ねたい、という学生が増えて欲しい、という目的の下この授業は行われている。これからも試行錯誤しながら、学生の能力とモチベーションを見極めて、授業を展開していきたい。

以 上